

親鸞浄土教に於ける輪廻思想に関する一試論

加 藤 英 象

はじめに

仏教の基本的な性格は「迷いから悟りへ」というものであり、具には「輪廻⁽¹⁾から脱した状態である解脱・涅槃を目指す」というものである。そしてその仏教の一つである親鸞浄土教の基本的な立場は、「他力信（横超金剛心）によって、迷界（輪廻）から抜け出し、悟界（浄土）へ生まれて直ちに仏と成る⁽²⁾」という所謂「往生即成仏」である。

そのような親鸞浄土教に関するこれまでの諸研究で、「他力信（横超金剛心）によって悟界（浄土）へ生まれて直ちに仏と成る」ということについては管見の限りでも相当量の成果が提示されてあるものの、「迷界（輪廻）から抜け出し⁽³⁾」という側面に焦点を絞った研究は殆ど見られなかった。そこで、親鸞には迷界の具体相について言及があまり多くないのではあるが、「迷界（輪廻）から抜け出し」ということに関わる親鸞著作内の文言（用語例）の整理・検討をして、親鸞浄土

教に於ける「迷界（輪廻）から抜け出し」という表現にどのような思想が見られるのか、考察を試みてみたい。

一 時代観・機根観

親鸞の輪廻思想を窺う上で、まずは時代および機根に対する親鸞の領解をおさえることが重要となってくるため、最初にその周辺の文言を整理しておくことにする。

親鸞は、一代仏教を聖道門（此土入聖）と浄土門（彼土得証）とに分類するが、『入出二門偈』の中で「当今は末法にしてこれ五濁なり ただ浄土のみありて通入すべし」〔註釈版五四九頁⁽⁴⁾〕と述べていることより、親鸞には「自身の在世時はすでに末法・五濁という時代で、浄土門のみが時機相應の成仏道である」との認識があったと言える。

また『教行信証（化身土文類）』の中で「無際よりこのかた助正間難し、定散心雑するがゆゑに、出離その期なし。みづから流転輪廻を度るに、微塵劫を超過すれども」〔同四一二頁〕

と述べ、『教行信証（総序）』の中で「弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の淨信、億劫にも獲がたし…中略…もしまたこのたび疑網に覆蔽せられば、かへつてまた曠劫を経歴せん」〔同二三二頁〕と述べ、『正像末和讃』の中で「末法第五の五百年 この世の一切有情の 如来の悲願を信ぜずは 出離その期はなかるべし」〔同六〇二頁〕と述べていることより、親鸞には「今現に迷いの生を受けている者は、無限の過去から迷いの生存を繰り返してきたのであり、信の無いままでは無限の未来へ迷いの生存が続いてゆく（『無有出離』）との把握があつたと言える。更に『教行信証（信文類）』の中で「無始よりこのかた、一切群生海、無明海に流転し…中略…真実の信樂なし。…中略…すべて雑毒雑修の善と名づく。また虚仮諂偽の行と名づく。…中略…この虚仮雑毒の善をもつて無量光明土に生ぜん」と欲する、これかならず不可なり」〔同二三五頁〕と述べていることより、親鸞が「末法世の一切衆生の為す行業は全て雑毒雑修の善・虚仮諂偽の行たることを免れず、それによる往生浄土は不可能」と理解していたと言える。

つまり親鸞は「現在のこの末法・五濁の世に存在している者は皆、阿弥陀仏の悲願を信ずる横超金剛心なくしては、輪廻が継続することになる」と考えていたことになる。

二 解脱の説示と「二者択一」

次に、輪廻から脱した状態であるところの「解脱」へ⁽⁵⁾「涅槃」を親鸞がどう語っているのかを整理する。

『教行信証（信文類）』の中で「往相の一心を発起するがゆゑに、生としてまさに受くべき生なし。趣としてまた到るべき趣なし。すでに六趣・四生、因亡じ果滅す。ゆゑにすなはち頓に三有の生死を断絶す。」〔同二五五頁〕と述べ、『尊号真像銘文』の中で「如来の願力を信するゆゑに…中略…五惡趣を自然にたちすて四生をはなる…中略…願力に帰命すれば五道生死をとづる…中略…本願の業因にひかれて自然に生るるなり。」〔同六四六頁〕と述べ、『高僧和讃』の中で「金剛堅固の信心の さだまるときをまちえてぞ 弥陀の心光摂護して ながく生死をへだてける」〔同五九一頁〕と述べていることより、親鸞には「今現に迷いの生を受けている者でも、信心を獲得すれば来生に迷いの生を受けることはない」との把握があつたと言える。

更には『尊号真像銘文』の中で「大願業力の不思議を疑ふところをもつて、六道・四生・二十五有・十二類生…中略…にとどまるとなり。いまにひさしく世に迷ふとしるべしとなり」〔同六六六頁〕と述べ、『一念多念文意』の中で「信心あらんひと、むなしく生死にとどまることなしとなり」〔同

六九一頁」と述べ、『高僧和讃』の中で「五濁悪世のわれらこそ 金剛の信心ばかりにて ながく生死をすてはてて 自然の浄土にいたるなれ」(同五九一頁)と述べていることより、解脱という事態について親鸞が「未信(無信) ↓ 迷いを出ない(とどまる)」・「獲信 ↓ 迷いをへだてる(閉じる)」という二者択一の構造で捉えていたと言える。

そして、上述の検討を「往生即成仏」の思想とも併せてまとめると、親鸞は「末法・五濁の世」という時代観と「無有出離」・「虚仮雑毒の行」という機根観に基づいて、「横超金剛心によつてのみ迷界の因果が断ち切られて、その命終時に自然に悟界たる浄土(真実報土)へ到り輪廻から抜け出すことができる(「解脱を得る」)」と考えていたことが分かる。

小結(おわりに)

結局、親鸞の輪廻思想を貫く軸となっているものは、「未信 ↓ 輪廻継続」・「獲信 ↓ 命終を契機として解脱」という二者択一の論理構造であり、「信心獲得のみによる(「信心獲得時の」)迷悟の一大方向転換」をその思想の特徴としている、との私見を以て本稿の一応のむすびとしたいと思う。

1 ちなみに私がこの度参考にした仏教語辞書群の説明によれば、おおよそ「輪廻」とは、「さまざまな生存状態をさまよう」

という意味の梵語「サンサーラ」の漢訳語で「生死」・「流転」等とも訳されている、とある。

2 親鸞のこのような思想は、「他力の真実信心を獲ると同時に正定聚の位(「往生成仏決定」)につき定まる」という旨の記述と、「正定聚の位につき定まった者はその命を終えると同時に浄土(真実報土)へ往生して即時に仏果を証得する」という旨の記述とを総合することで窺い知れる。なお、本来であれば一々の文証を列挙すべきであるが、親鸞教学研究の伝統において共通解釈として謂わば常識化されている事柄に関する引文については、紙幅の都合上省略する。その意味で、本稿が研究論文としてはやや厳密性を欠くものになってしまう点を予め断っておく。

3 私が探し得た先行研究では、早島鏡正氏の「親鸞における輪廻と解脱」(『インド思想と仏教』中村元博士還暦記念論集)所収・一九七三年」という論文で、「浄土教に説く往生浄土は、仏教一般で論ずる『輪廻から解脱へ』の道ゆきと同じように、『輪廻から往生へ』の道ゆきである…中略…親鸞はこのように浄土教諸師の立場をうけている」との指摘が、或いは武田未来雄氏の「親鸞における輪廻の意味」(『宗教研究』第三三五号所収・二〇〇三年」という論文で、「輪廻は過去世、未来世等の時間を前提とするが、しかし、親鸞における輪廻は必ず出遇いの今、信の一念という現在に立って見られ、現在を抜きにした実体的な世としての過去や未来ということではない」との指摘がなされていたほどで、その「輪廻」を教学体系(枠組み)の中で分析したものは無かった。

4 「」内は出拠。註釈版とは『浄土真宗聖典―註釈版第二版―』(本願寺出版社刊・二〇〇四年)のことであり、左訓は『浄土

真宗聖典——原典版——解説・校異』（本願寺出版部刊・一九八五年）を参照した（以降同様）。

5 親鸞は『一念多念文意』の「眞実信心をうれば……中略……とき・日をもへだてず、正定聚の位につき定まる……中略……この位に定まりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となる」（同六七八～六八〇頁）という文言の「無上大涅槃」の語に「マコトノホトケナリ」との左訓を施し、また『浄土和讃』の「解脱の光輪きはもなし 光触かぶるものはみな 有無をはなるとのべたまふ 平等覺に帰命せよ」（同五五七頁）という文言の「解脱」の語に「ケタチトイフハサトリヲヒラキホトケニナルライフ」との左訓を施している。したがって、親鸞において「解脱」は「涅槃」と同一義に位置付けられていることが分かる。

6 これは「信疑決判」と呼ばれる教誡であるが、親鸞教義においては「信疑得失」という教誡もある。親鸞は浄土往生について『三経往生文類』等で、第十八・十九・二十願の「生因三願」の義を立て、それぞれ「他力念仏往生」・「自力諸行往生」・「自力念仏往生」の三往生として配当し、他力念仏往生を「即往生」（＝報中の眞実報土への往生）、自力諸行と自力念仏の往生を「便往生」（＝報中の方便化土への往生）に分けている。そしてその報化に得失があるということが従来「信疑得失」として明らかにされてきているところである。然るに便往生は、行者が諸機各別の「行」を回向することを往生の必要条件とするものである点において、親鸞の時代観や機根観に照らし合わせてみると、やはり「今日今時に至っては便往生も結果的に叶わぬ道理」との領解に帰結していたのではないかと私は考える。

7 最後に、「三界」・「六道」・「娑婆」・「穢土」・「三千大千世界」といった迷界を定義する言葉も含めた再検討、それに関連した

仏教の宇宙観たる「須弥山説」の考察、輪廻の主体や業因の問題などの諸事項が、今後の課題として残ったことを付言しておく。

〈キーワード〉 親鸞、輪廻、往生即成仏、解脱、涅槃

（龍谷大学大学院博士後期課程）